

氏 名	安田 優
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第646号
学位授与年月日	令和6年3月22日
審 査 委 員	主査 教授 長井 篤
	副査 教授 岸 博子
	副査 准教授 矢野 彰三

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

虚血性心疾患は世界的に死因の上位を占め、その中でも急性冠症候群（ACS）は適切な対処がなされない致死的転機をとる疾患であり、予後を改善することは世界共通の課題である。1990年代から2000年代にかけて、ガイドラインに基づく治療管理の確立により、ACSの急性期及び慢性期の予後が改善したことが報告されている。一方で2010年代以降、特に2010年代後半のACSの予後についての報告は少ない。申請者は島根県出雲市における、2010年代後半とそれ以前の期間におけるACSの中期予後を調査した。2009年8月から2018年7月に当院及び島根県立中央病院にてACSの診断で入院加療を行い、生存退院した895例を対象とした。対象は退院日によって3群に振り分けた（T1：2009年8月～2012年7月、T2：2012年8月～2015年7月、T3：2015年8月～2018年7月）。主要評価項目は退院後2年以内の主要心血管イベント（MACE）として全死亡、ACSの再発、脳卒中、副次評価項目は大出血と心不全入院とした。主要評価項目では、全ACS症例で、MACEの発生率は他の2群と比較してT3群で有意に低かった。ST上昇型心筋梗塞（STEMI）症例において、MACEの発生率は他の2群と比較してT3群で低い傾向を示した。非ST上昇型心筋梗塞（NSTEMI）症例において3群間に統計学的差はなかった。副次評価項目である大出血と心不全による入院の発生率は、全ACS症例及び各サブグループにおいて3群間に統計学的差はなかった。この結果から、申請者は2010年代後半のACS症例の中期予後は改善しており、主にSTEMIのイベント発生率の低下に由来すると結論づけた。治療法の進歩、ガイドライン遵守の徹底に裏付けられ、今後更にACSの予後改善が見込めることを示した臨床的に価値ある研究であり、博士（医学）の学位授与に値すると判断した。